



©ai ueda ©Takatsumi Ueno

第185回定期演奏会

一般発売7/28 [会員先行7/26.27]

2021年9月18日(土) 13:30開場 14:30開演

三井住友海上しらかわホール

指揮/太田弦 ピアノ/山中惇史*

・リスト:交響詩「前奏曲」S.591

・リスト:ピアノ協奏曲第1番変ホ長調S.124*

・フランク:交響曲ニ短調FWV48

ラフ編曲のバッハ、オネゲル、シューマン……と〈音楽の川〉をめぐる壮大な旅をお楽しみいただいている本日から、ちょっと夏休みをはさんで次回の定期は9月18日。若く瑞々しいマエストロ・太田弦さんを指揮台に迎え、気鋭のピアニスト・山中惇史さんの共演で、19世紀の音楽界に生きた〈ヴィルトゥオーゾ(超絶技巧)・ピアニスト〉出身の作曲家ふたり、を特集いたします。

未来を拓く才能たちと出逢うことが、セントラル愛知交響楽団にもたらす刺激もきっと大きいはず。……経験豊富なオーケストラも、日々新しい気持ちで音楽に向かい合っているのは当然のことですから、音楽の前にあって若手も大ベテランも違いはありません。けれどもやはり、躍進を続ける俊英たちをお迎えしての音楽づくりは、どんな新しい視野を拓いてくれるのか、楽しみではありませんか。次回定期もぜひ、その昂揚をご一緒に。

◆素晴らしい共演者たち——気鋭の才能との出逢い

まずピアニストのお話から。——次回、リスト〈ピアノ協奏曲第1番〉を披露して下さるピアニスト・山中惇史さんは1990年生まれ、愛知県岡崎市のご出身です。ソロや協奏曲はもちろん、室内楽の名手としても共演者たちから絶大な信頼をうけるピアニストであり、室内楽や合唱曲など数多くの作品を発表されている作曲家でもあります。

みずから創作も手がける作曲家としての視線や思考が、ピアニストとしての素晴らしい演奏にどのように反映しているのか……私事ながら、わたくしが東京の第一生命ホールでご案内役をつとめている《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》というコンサート・シリーズがありまして、こちらにも山中さんは重ねてご出演くださり、お客さまからも大好評をいただきました(その才あふれる音楽は、初めてお聴きになった皆さんにもすぐ伝わったのです)。9月定期でも、きっと新たなファンを獲得されることでしょう……

そして、指揮の太田弦さん。山中さんよりも歳下の1994年生まれ、北海道札幌市のご出身です。——2015年、第17回東京国際音楽コンクール(指揮)で第2位および聴衆賞を受賞され、一躍注目を集めました。このとき、わたくしも取材記事を書くために予選から客席で聴いていたのですが、当時21歳・東京藝大4年だった太田さんの登場には驚かされました。丁寧に作品を把握してきっちり明快な技術でオーケストラを響かせるそのさま……本選でも、熱い音楽に確かな視界を拓く好演で、演奏後に話し合った審査員のマエストロたちも大絶賛でした。

そして2019年春からは、若くして大阪交響楽団の正指揮者に迎えられることになりました。その活躍と躍進の成果も、9月定期で体感できることでしょう。実は、次回の最初で演奏されるリスト《前奏曲(レプレリュード)》は、東京国際音楽コンクールの第2次予選課題曲でもありました(指揮者の才能をみるにふさわしい難曲なのです)。今回は審査ではなく、楽団とともに豊かな音楽をつくるプロフェッショナルな喜びの場。ぜひお楽しみに。

◆華麗なる開拓者・リストの魅力聴く

さて、次回定期でお聴きいただくふたりの作曲家について、少しご紹介しておきましょう。

リストとフランク——このふたりは、作品を聴くと対照的にもみえる人々ですが、先に述べたように、それぞれ〈ヴィルトゥオーゾ(超絶技巧)・ピアニスト〉として出発したふたりです。その後の経緯が真逆ですが。

ハンガリー出身の作曲家/ピアニスト、フランツ・リスト(1811~86)のほうは、若い頃から華々しい活躍を繰り広げ、コンサートに詰めかけた多数の女性たちがリスト登場に大熱狂、失神する人まであらわれるほど……という人気ぶり。リストの書いた(凄まじい技巧を要する)ピアノ曲をみても、当時の批評をみても、本当に傑出したピアニストだったようです。

その生涯と作品については、福田弥『作曲家◎人と作品シリーズ リスト』[音楽之友社、2005年]をお読みいただきたいと思いますが、作曲家としても音楽史を動かす影響力を持ったひとで、次回定期で最初にお聴きいただく、交響詩《前奏曲(レプレリュード)》も、リストが創始・開拓した〈交響詩〉というジャンル、その先駆けのひとつとして知られる傑作です。

前奏曲、とはジャンルの名前なのに、なぜタイトルに……?というあたりがややこしいのですが、これは、フランスの詩人ラマルティエヌの詩から「我々の人生は、死への前奏曲である……」という句をひいてタイトルをつけたために、こうなった次第。「運命の嵐に愛は吹き散らされるが、傷ついた魂は穏やかな自然のふとこで癒され、人は再び闘いのなかへ……」といった標題を、起伏に富んだオーケストラでたっぷり聴かせてくれる作品です。

もっとも、もとは別の詩人の作につけた合唱曲《四大元素》の序曲だったのを、後からラマルティエヌの標題に変えたそう……その割にぴったりハマっているのが凄いですね。

そしてリストからもう1曲、〈ピアノ協奏曲第1番 変ホ長調〉も華麗な傑作です。切れ目なく奏される20分ほどの作品なのですが、中身の濃さは素晴らしいもの。華麗な超絶技巧が存分に披露されるばかりでなく、リストが工夫した音楽の組み立てかたも面白いもので、(ちょっと難しい言い方になりますが)いくつもの楽章とソナタ形式とをひとつに融合したうえに、普通のコンチェルトと違って4楽章形式にも近づけてみたり……と、短いなか創音が溢れています。

さらに、この曲のテーマの扱いかたは、次にお聴きいただくフランクの交響曲とも通ずるところがありまして、お聴きいただくと「ああ」と感じられることもあるはず。どうぞお楽しみに!(この曲の独創性や音楽史上の意義については、小岩信治『ピアノ協奏曲の誕生 19世紀ヴィルトゥオーゾ音楽史』[春秋社、2021年]がとても面白いのでぜひ)

◆華やかさに背をむけて——フランクの重厚精緻な傑作を聴く

そして、次回定期の最後は、セザール・フランク(1822~90)の〈交響曲 二短調〉です。

フランクは、ベルギー東部のリエージュ生まれ。人生の大半をフランスで過ごして帰化したので、もっぱら〈フランス音楽〉の作曲家として語られる存在です。

幼い頃から楽才を発揮、父の意向もあって少年期は流行りのオペラに基づく超絶技巧の曲を披露、いずれリストのような華やかなヴィルトゥオーゾに……と期待されていたのですが、過労で倒れるほどの華やかな暮らしに疲れてしまい、若くして引退。家を飛び出して教会オルガニストや後進の指導などを続けながら、自分の信ずるところに従って宗教曲・オルガン曲など作曲家としての活動を続けたのです。

地味な歩みが続けたフランクでしたが、教会オルガニストとしても高く評価され、彼の自作演奏を聴いたリストは「私はいまバッハを聴いた!」と感激したほど。やがてフランクを敬愛する弟子たちも続々と頭角をあらわし、フランス楽壇で有力な流派をつくるに至りました。

そんなフランクが書いた〈交響曲 二短調〉は、いくつかの動機が全曲を通してはたらき統一する、という(循環主題)の技法を見事に生かした傑作です(同時代のひとでライバル視もされていたサン＝サーンスの交響曲第3番《オルガン付き》にも触発されたといいますが、リストの〈ピアノ協奏曲第1番〉ともぜひ比べて聴いてみていただきたいのです)。

この曲では、主に3つの〈循環動機〉が登場して、全3楽章を統一しています。その精妙には驚かされますが、もちろん動機を無理に覚えなくとも、聴いていると自然に感得されますから、心配はご無用。その重厚な管弦楽法や豊かな転調、巧みな構成……たいへん充実して隙のない(しかし広々と豊かな!)名作です。優しげな断片が呼び交わしながら陰翳をつくり、循環形式の精緻が壮大な歓喜へ高まってゆく感動的なフィナーレまで、ぜひ生の演奏で体感してみてください。では、次回もこのホールでお会いいたしましょう。

やまの たけひろ 山野雄大

Profile

ライター[音楽・舞踊評論]。『音楽之友』『レコード芸術』『バンドジャーナル』各誌をはじめ雑誌・新聞への寄稿、テレビ・ラジオ番組での解説、CDライナーノート・企画構成、オーケストラやバレエ公演の演目解説、取材撮影など多数。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》司会・構成。

